3：乳牛の飼育管理における福祉レベル総合評価法の有効性の検討

畜産生命科学研究部門　瀬尾哲也　家畜生産科学ユニット　井上友恵
メールアドレス　seo@obihiro.ac.jp

研究の概要

【目的】

当研究室では、乳用牛の福祉レベルの向上を目指すため、農場におけるアニマルウェルフェア総合評価法の作成を検討している。EUにおいても同様に評価法が開発され、2009年にWelfare Qualityとして発表されたところである。

そこでWelfare Quality（以下WQとする）および当研究室（以下JPとする）の乳牛福祉評価法を、酪農家へ適用することにより、これらの乳牛福祉評価法の妥当性を検討することを目的とした。

【方法】

2010年11月に道内11戸(フリーストール6戸、つなぎ飼い5戸)の酪農場において、JPおよびWQの評価法により飼養環境の調査および経営者へのアンケート調査を行なった。最新3か月分の乳検データおよび前年度の包括家畜共済引受台帳、家畜共済病傷事故記録も収集した。これらの調査結果と収集データを用いて乳牛福祉レベルの評価を行なった。なお、当センターも調査対象に加えた。

【結果】

JPよりもWQで評価した福祉レベルの方が、全調査農場において低い結果となった。JPでは、つなぎ牛舎が福祉レベルの高い方から上位3～7位を占めたのに対し、WQではつなぎ牛舎が下位5位を占めた。

また評価項目を、動物、施設、管理の3つのベースからみると、最も満たしにくい評価項目はどちらの評価法も施設ベースであった。さらに、WQの総合スコア(最良、良、可、不可)に合わせてJPもスコア付けすると、不可に相当する農場はWQでは 2戸であったのに対し、JPの方が6戸と多くなった。

以上の結果から、WQによる評価はJPよりも高得点を得ることは難しく、厳しい評価法であると言え、さらにWQは、フリーストール牛舎よりもつなぎ牛舎の方が低く評価されることが認められた。

WQの評価法は外部機関が福祉レベルを評価し認証に利用するために作成された評価法であり、JPの評価法は酪農家自身が飼育管理上の問題点を明らかにすることを重視した評価法であり、評価法の使用目的が異なる。

JPの評価法は、今年度末に畜産技術協会から発表されることになっている。今後、本評価法を利用し、酪農家自身が農場の問題点を認識し、改善していくことで、乳牛の福祉レベルの向上を図っていくことが期待できる。